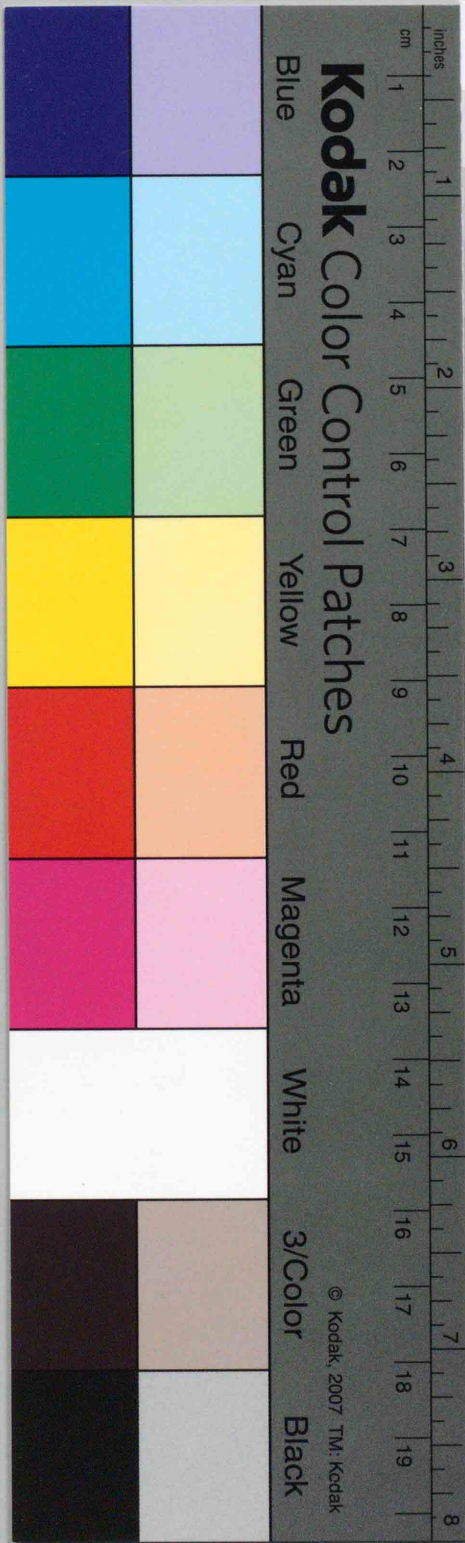


教科書文庫  
4  
110  
33-1943  
2000022339

初等科修身

文部省

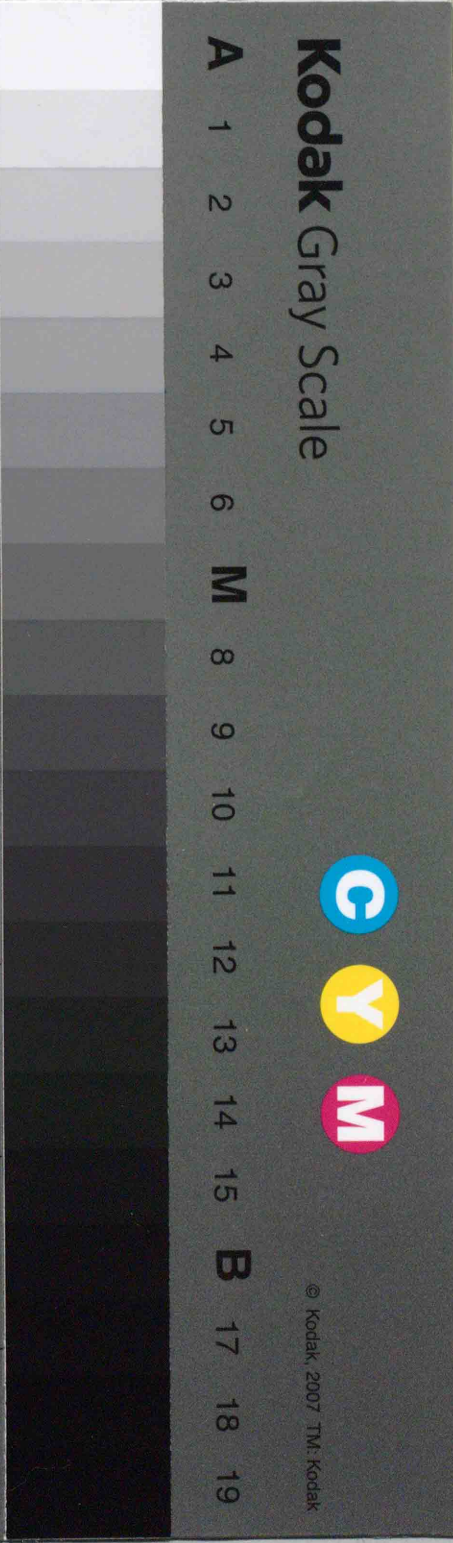
一



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

40425  
教科書文庫  
4  
110  
33-1943  
2000.0  
22339





教科書文庫  
4  
110  
33-1943  
2000022339

初等科修身

文  
部  
省

一  
広島大学図書  
2000022339  


資料室

375.7  
Mo 14

広島大学  
図書印

広島大学  
教  
22339  
図書







もくろく

一	み國のはじめ	一
二	春	四
三	日本の子ども	九
四	小子部 <small>ちひさこべ</small> のすがる	十三
五	時のきねん日	二十
六	種痘 <small>しゅとう</small>	二十四
七	つばめのす	三十
八	夏の夕方	三十四
九	大神 <small>おほみかみ</small> のお使	三十八

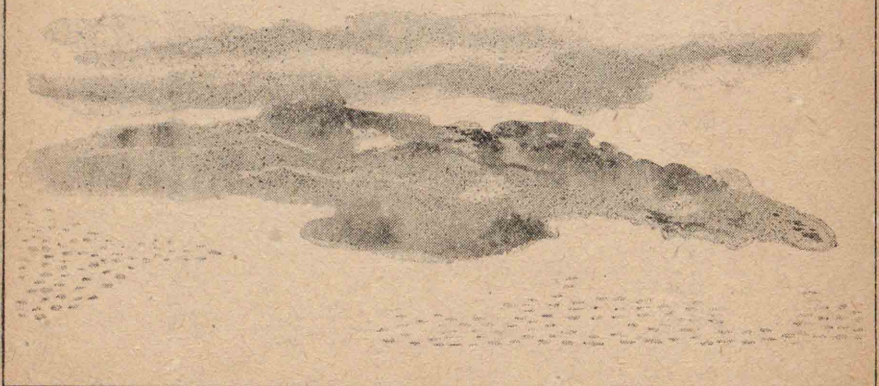


十	秋	四十五
十一	にいさん	四十九
十二	心を一つに	五十四
十三	一つぶの米	六十一
十四	多聞丸 <small>たもんまる</small>	六十六
十五	消防演習 <small>せうぼうえんしゆ</small>	七十一
十六	日の丸の旗	七十六
十七	冬	八十一
十八	圓山應舉 <small>まるやまおうきよ</small>	八十六
十九	負けじだましひ	九十一
二十	皇后陛下 <small>くわうごう</small>	九十六

廣島の大學  
圖書印



一 米國のはじめ  
遠い大昔のこ  
と、いざなぎの  
みこと、いざな  
みのみこととい  
ふ、お二方の神  
様がいらっしや





二  
いました。

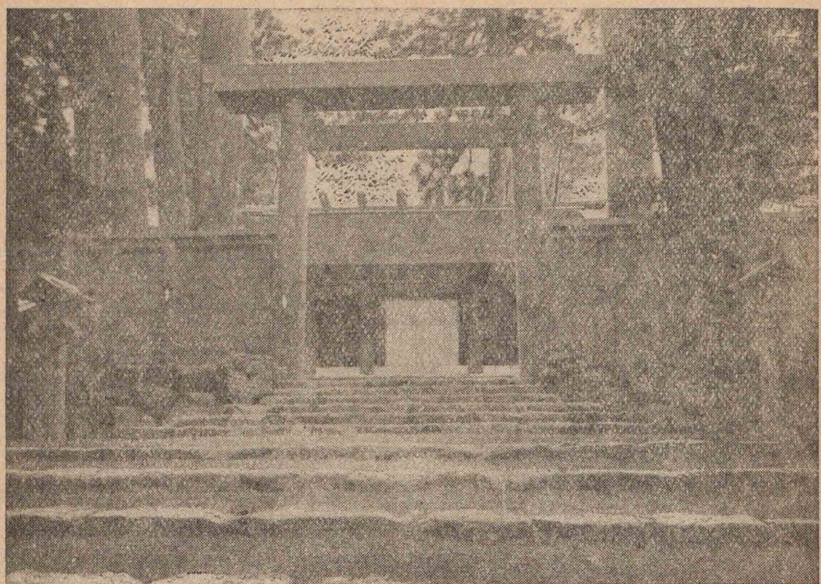
このお二方が、天あまの浮橋うきはしにお立ちになって、天あまのぬぼこといふほこをおろして、海の水をかきまはしながら、おあげになりました。すると、ほこの先から、海の水のしづくがしたたり落ちて、一つの島となりました。

お二方は、この島におくだりになって、ごてんをお作りになりました。さうして、次々と、たくさん島

をお生みになりました。日本の國は、かうして、できあがって行きました。

國ができあがると、今度は、たくさん神様をお生みになりました。

天照大神あまてらすおほみかみが、お生まれになりました。いざなぎのみ





ことは、たいそうお喜びになつて、かけていらつしや  
つた御首おんくびかざりを、おさづけになりました。

天照大神は、日神ひのかみとも申しあげ、天皇陛下の御祖先ごそせん  
にあたらせられる、御徳おんとくの高い神様であります。

伊勢いせの内宮ないくうは、この天照大神を、おまつり申しあげ  
たお宮であります。

## 二 春

神様のお生みになつた日本の國は、山川の美しい  
國です。ことに、春夏秋冬の  
うつりかはりのはつきりし  
た國です。

冬の間、ずっと寒い風に吹  
きさらされてゐた草や木は、  
春になると、みどりの芽を出  
して來ます。暖い風がそよ

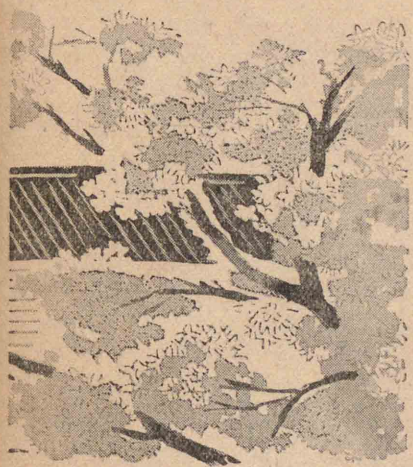




そよ吹いたり、かすみかたなびいたりする間に、草や木はすくすくと育って行きます。

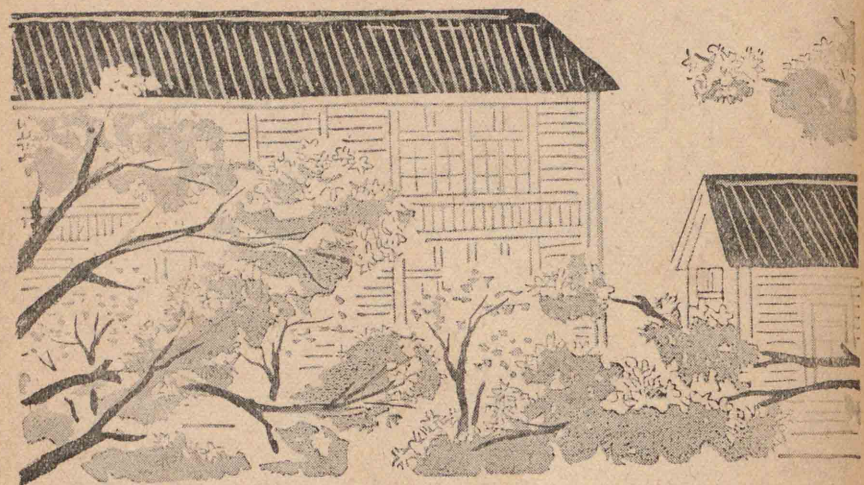
梅が咲き、桃が咲き、さくらが咲き、いろいろの花が咲きそろふころになると、めじろや、うぐひすや、

たくさんの小鳥が、木の枝から枝へとんで、うれしさうにさへづります。てふやはちも、よるこんで、花のみつをさが



してあるきます。空には、高くひばりがまひあがります。私たちも、たいそううれしくなつて、つみ草をしたり、野山に遊んだりします。

春のけしきは、ほんたうに明かるくて、おだやかです。冬にはあらい波の立ってゐた





海も、おだやかにあります。川の水も、池の水も、明  
かるくすんで、何となくやはらかさうに見えます。

夜の空には、おぼろ月がのぼります。うすいきぬ  
でもたれたやうに、ぼうとうるんで、見あげる私たち  
の心をおだやかにします。

私たちは、三年生になりました。日本の春のやう  
に、明かるい、ほがらかな心の人になって、仲よくく  
らすやうにつとめませう。

### 三 日本の子ども

世界に、國はたくさんありますが、神様の御おんちすぢ  
をおうけになった天皇陛下が、おをさめになり、かぎ  
りなくさかえて行く國は、日本のほかにはありませ  
ん。いま日本は、遠い昔、神様が國をおはじめになっ  
た時の大きなみ心にしたがつて、世界の人々を正し  
くみちびかうとしてみます。



私たちのおとうさん、にいさん、をぢさんなどが、みんな勇ましくたたかっただけで、戦場に出ない人も、みんな力をあはせ、心を一つにして、國をま

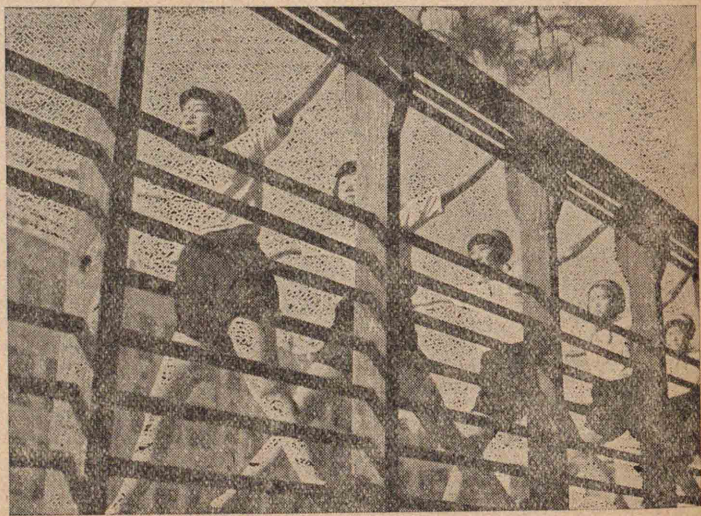


もらなければならぬ時です。

正しいことのおこなはれるやうにするのが、日本人のつとめであり

ます。私たちは、神様のみをしへにしたがって、世界の人があはせになるやうに、しなければなりません。

日本の子どものだいじなつとめは、一生けんめいにべんきやうすることです。べんき



やうは、ただ、ものごとをおぼえるだけではありませ



十二  
ん。心を正しくし、美しくし、よく考へ、よく工夫し、か  
らだを強くきたへることが、みんなべんきやうです。  
私たちは、日本のやうにすぐれた國に生まれたこ  
とをよくわきまへて、心をりっぱにみがかなければ  
なりません。さうして、からだをぢやうぶにし、強い  
たくましい日本國民になつて、お國のためにはたら  
くことができるやうに、しっかりべんきやうするこ  
とがたいせつです。

四 小子部のすぎる

雄略天皇は、すぎるといふ

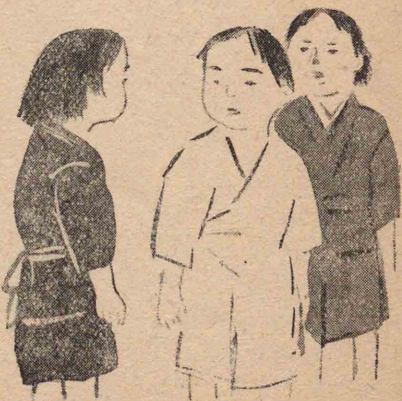
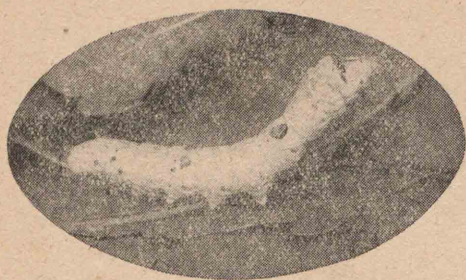
やくにんを

おめしになつて、

「こ」をたくさん集めて

来いとおほせになりました。

そのころ、かひこのことを「こ」と





いひました。

すがるは、心がやさしくて、子どもがすきであります。  
した。

「こを集めてまゐるのでございますか。かしこまり  
ました。」

と申しあげて、すがるは、出かけて行きました。「こ」  
といふのを、子どものこととはやのみこみして、にこ  
にこしながら、町や村へふれて歩きました。

「陛下のおほせだから、子どもたちは集れ。さあさ  
あ、みんなついて来い。」

天皇のおめしと聞いて、子どもたちは、いったい何  
ごとであらうかと、男の子も、女の子も、すがるのま  
はりに集りました。

「これこれ、そっちの子、はなをたらしめてはいけ  
ない。これこれ、こっちの子。口をあめぐりさせて  
あるぞ。これこれ、さわいではいけない。みんな、



おぎやうぎよくするのだ。」

子どもたちは、大喜びで、すがるのそでにぶらさがったり、腰にまきついたりします。

すがるは、歩き始めました。子どもたちは、みんな、いろいろの歌を歌ひながら、後から、ぞろぞろついて行きます。

御所ごしよにまゐると、子どもたちを待たせておいて、



すがるは、すぐにお取次ぎをねがひました。

「おほせによつて、子どもをたくさん集めてまゐりました。」

天皇がごらんになると、たくさんの子どもたちが、おぎやうぎよくすわつてゐます。みんな、すがるに





教へられたとほり、両手をついて、つつしんでおじぎをしました。

天皇は、お笑ひになりました。さうして、

「子どもたちを、だいに育ててやるやうに。」

と、おほせになりました。

御所の近くに、大きなやしきをたまはって、すがるは、たくさんの子どもたちを、教へみちびくことになりました。

「この子どもたちが、りっぱな國民となつて、陛下に忠義ちゆうぎをつくし、お國のために、はたらくことができ、るやうに、育てあげなければならない。」

と、すがるは考へました。

「みんな、陛下のみめぐみを忘れてはならないぞ。」  
いつも、さういって聞かせながら、子どもたちをだいに育てました。



五 時のきねん日

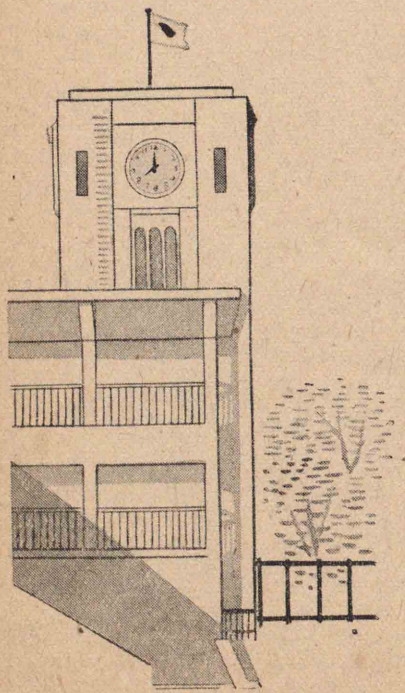
六月十日は、時のきねん日です。

この日は、今から千三百年ばかり前に、天智天皇が  
ごじしんでお作りになった水時計で、始めて、みんな  
に時をお知らせになった日であります。

天智天皇の、お作りになった水時計といふのは、水  
のもれるしかけて、時をはかる時計です。

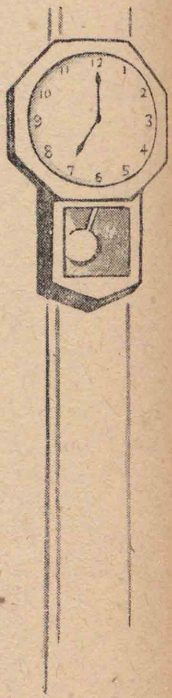
今では、はしら時計や、おき時計や、うで時計や、た  
くさんあって、正しい時を知らせてくれますが、昔の  
人は、時を知るのに、いろいろと工夫したものであり  
ます。

しかし、どんなにリ  
っぱな時計があつて  
も、私たちが、時を知る  
だけでなく、時を正し





く守るやうに、心がけなければ何にもなりません。  
 学校の授業は、時間通りにおこなはれます。家にかへつても、おさらひとか、運動とか、ごはんとか、みんな時をきめて、それをよく守らなければなりません。さうでない、人にめいわくをかけるばかりでなく、から



だを弱くしたり、病氣になったりします。  
 時を守ることは、やさしいやうで、なかなかむづかしいことです。時計を見るたびに、私たちは、正しく時を守るやうに心がけませう。  
 時のきねん日をきねんして、みんなで、きまりよくくらすやうに心がけませう。



六 種痘しゅど

六月になつて、私たちは、種痘をしました。

今年しなかつた人は、來年らいねんすることになつてゐます。種痘は、疱瘡はうさうといふ、おそろしい病氣をふせぐためにするのです。

ジェンナーといふ人がありました。少年せうねんのころ、いしやの弟子てしになりましたが、ある日のこと、ぎょうにう

しぼりの女が、先生に病氣をみてもらひに來ました。

その女は、顔にひどいふきでものがあつて、きのどくなやうすをしてゐました。

先生は、しんさつをすまして、

「疱瘡です。」

といひました。すると、その女は、ふしぎさうな顔をして、

「私は、いつか牛痘ぎゅうどにかかったことがありますから、



疱瘡にかかるはずはありませんが。」

といひました。そばで聞いてゐたジェンナーは、

「これは、ふしぎな話だ。もしかしたら、この女のいふことは、ほんたうかも知れない。ひとつ、しらべてみて、よいちれうはふを考へ、きのどくな病人をすくつてやりたい。」

と思ひました。

まづ、人のからだに牛痘をうゑて、疱瘡にかからな

いやうにすることを思ひつきました。友だちに話をすると、みんなあざわらつてあひ手にしません。

「そんなことをいふなら、つきあひをやめるぞ。」

とまでいひました。

それでもかまはず、ジェンナーは、二十年あまりも、いろいろと、牛痘や疱瘡のことをしらべて、こんきよく、工夫をつづけました。さうして、とうとう、種痘の方法を見つけ出しました。



ジェンナーは、この方法を、自分の子どもにやってみました。わざと、疱瘡をうつさうとしましたが、どうしてもうつりませんでした。そこで、この方法を、早く世の中の人に知らせようとして、



そのことを本に書きました。

世の中の人には、なかなかそれを信用しんようしませんでした。

「牛痘をうゑた子どもは、顔がしだいに牛になって、  
 聲も牛のほえるやうになるさうだ。」

などと、わる口をいひました。

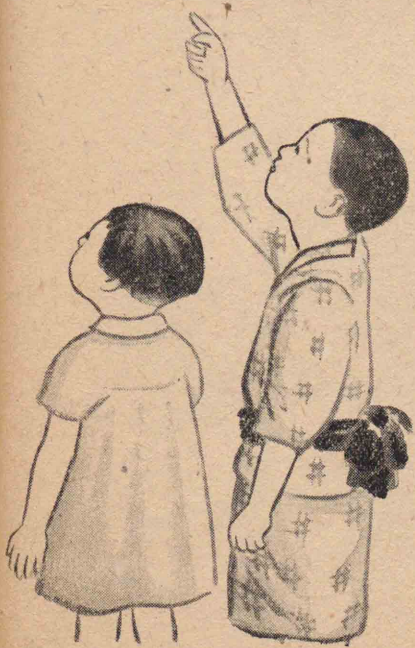
しかし、そのうちに、だんだんこの種痘のほんたうによいことがわかって、世の中にひろまるやうになりました。



七 つばめのす

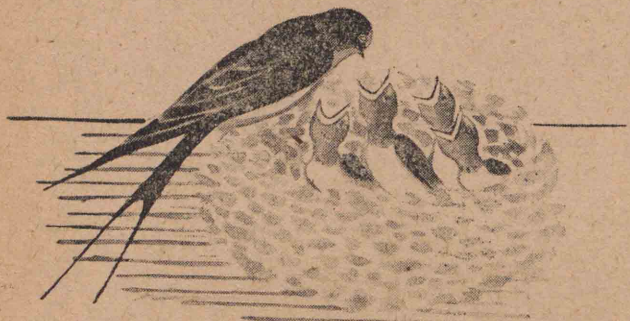
つばめは、毎日、せつせと、土をくはへて來ました。  
いく日かたつと、正男さんの家ののき下に、つばめの  
すができあがりしました。

正男さんは、つばめ  
がじつとしたまま、す  
からはなれないのを



見て、できるだけ静かにしておきました。

ある日のこと、庭先に、かはいらしい卵のからが落  
ちてゐるのを見つけました。さ  
っそく、おとうさんにいひます  
と、おとうさんは、  
「つばめの子が生まれたのだよ。」  
とおっしゃいました。正男さん  
は、うれしくなつて、早く子つば





めが顔を出さないかと、たびたび見あげましたが、つばめのすは、ひっそりとしてみました。

二三日たって、やっど、「チイチイ」といふ小さな鳴聲が、聞え始めました。

つばめの親は、毎日、一生けんめいです。すにかへって来たかと思ふと、またすぐとび出して行きます。そのたびに虫を取って来ては、子つばめにたべさせます。

子つばめは、だんだん大きくなって、おどけた顔をするの中から出し始めました。親つばめがかへって来ると、「私にください」「私にください」といって、たいへんなさわぎです。

親つばめは、虫をくはへて来て、子つばめの口に入れてやると、今度は、子つばめのしたふんをくはへてとび出して行きます。正男さんは、親つばめのすること、すっかり感心しました。



八 夏の夕方

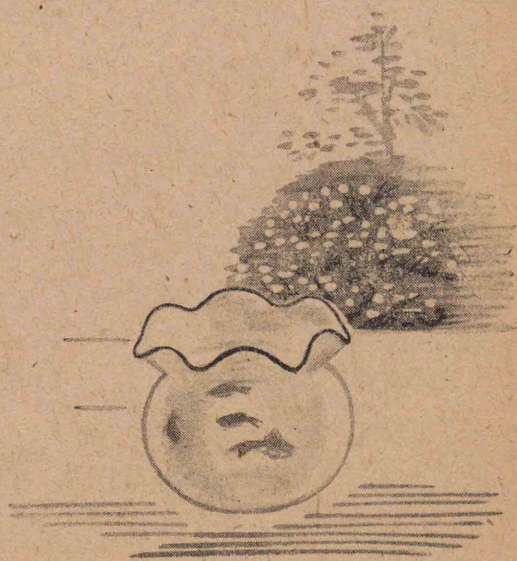
夕方になりました。

ねえさんが、

「庭に水をまきませう。」

と、私を呼びました。

夏が来てから、夕方に、水をまくのは、ねえさんと私のしごとになってみます。



私は、すぐに元氣よくへんじをして、庭へ出ました。はだしになってみると、地面は、夕方になっても、まだやけつくやうです。

ねえさんは、はうきとちり取りを持って来て、

「私のはくから、水をくんでおいで。」

といひました。

私は、小さなバケツをさげて、水をくみに行きました。



ねえさんは、せつせと庭をはいてゐます。

私は、その後から、勢よく水をまきました。

庭をはいてしまふと、ねえさんが、

「私もまきませう。」

と、バケツを取つ

て来ました。

今度は、二人でまきました。木の根もとにもかきました。くわだんの草花にも、水をやりました。草や木が、みんな晝間の苦しみを忘れて、生きかへったやうになりました。







水まきをすますと、  
私たちは、だうぐをも  
どのところへかたづけ  
ました。ねえさんとい

つしよに、きれいな水をくんで、からだをふいたとき  
には、何ともいへないよい氣持になりました。

九 おほみかみ 大神のお使

あまてらす おほみかみ  
天照大神は、たけみかづちの神、ふつぬしの神、お  
二方の神をお使として、出雲いづもの大國主神のところへ  
おつかはしになりました。

お使の神様は、出雲へおくだりになって、大國主神  
に、おごそかにかう申されました。

「天照大神のおほせであります。日本の國は、大神  
の御子孫ごしそんのおをさめになる國である。このおほせ  
を、あなたはどうお考へになりますか。」



大國主神は、

「うけたまはりました。

このことにつきました

ては、私の子の事代

主神ぬしに、おほせをい

ただきたうござい

ますが、あいにく、

魚を取りに遠くの

海べへ出て、まだ

かへってまありま

せん。」

と、お答へになりました。

そこで、お使の神様は、

事代主神にあつて、おたづねになりました。

すると、事代主神は、

「まことに、もったいないことでございます。おほ





せによりまして、きっと、この國土を大神の御子孫  
にたてまつりませう。」

と、お答へになりました。

お使の神様は、もう一度、大國主神のところへお  
かへりになって、

「あなたのお子、事代主神は、かうかういはれました。」  
と申されました。

大國主神は、つつしんでお答へになりました。

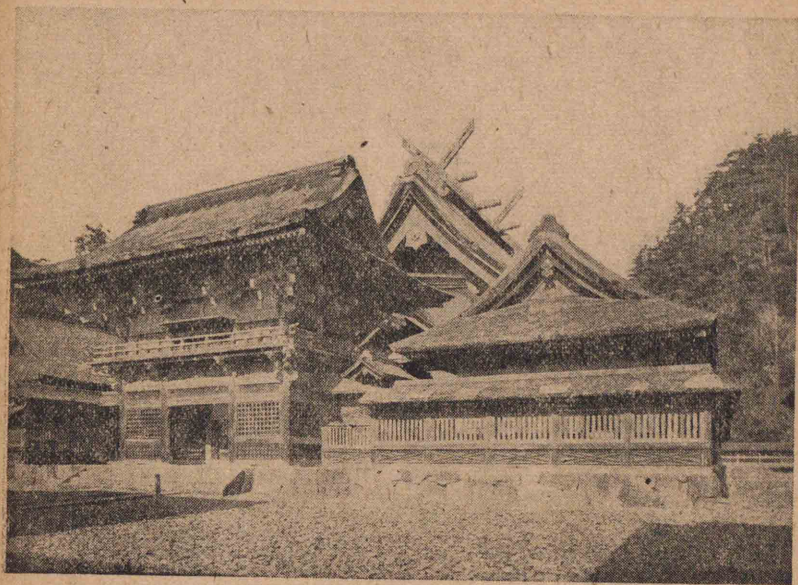
「私の子、事代主神が申しました通り、大神のおほせ  
にしたがひまして、この國土をたてまつります。

私も、私の子も、まごころをもつて、大神の御子孫  
におつかへいたします。」

お使の神様は、高天原<sup>たかまがはら</sup>へおかへりになって、天照大  
神に、このことを申しあげられました。

天照大神は、大國主神のまごころを、たいそうお喜  
びになりました。さうして、大國主神のために、大き





な宮をおつくらせになりま  
した。これが、出雲の大社<sup>おほやしろ</sup>  
の始りであります。

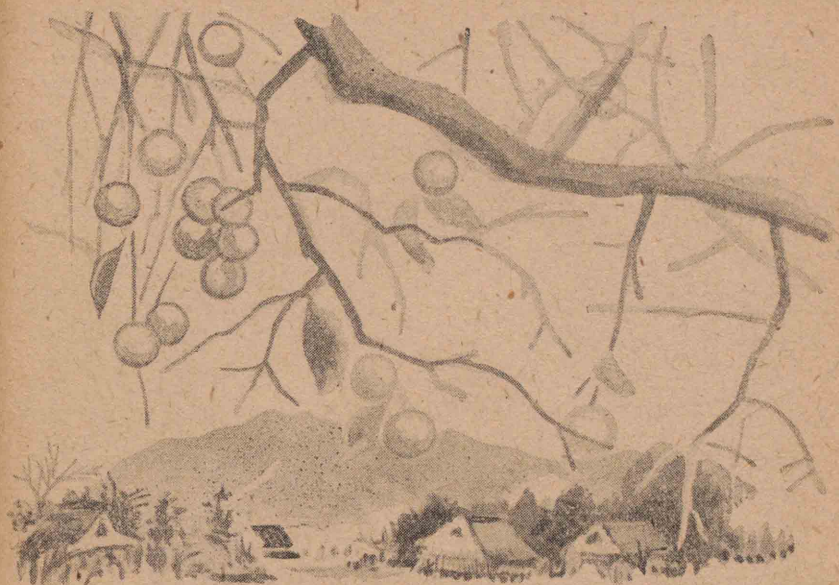
また、お使となられたた  
けみかつちの神は、鹿島<sup>かしま</sup>に、  
ふつぬしの神は、香取<sup>かとり</sup>に、い  
づれもおまつりしてありま  
す。

## 十 秋

さわやかな秋の風に吹かれて、すすきの穂は白く  
光ります。なでしこや、をみなへしや、ききやうの花  
は、見るからにかはいらしい姿で咲いてゐます。

空は、すみからすみまで、まっさをに晴れ渡って、  
ときどき、「きききき」と、もずが聲高く鳴きます。夜は  
草むらで、松虫や、すず虫が、美しいねをたてます。





すきとほった秋の光をあ  
びて、きれいな空気を胸い  
っぱい吸ふと、身も心も、ひ  
きしまつてきます。

稲の穂が出そろって、や  
がて、きんいろの波が、たん  
ぼ一面おほふやうになりま  
す。そろそろ、稲かりが始

ります。

柿の實は赤くなり、みかんは黄色くなり、野山の木  
といふ木は、黄に、くれなゐに、美しく色づきます。

田や畠では、みんな、取入れにいそがしく、ひたひに  
汗をにじませてはたらきます。

いつのまにのぼったのか、鏡のやうな月が、あたり  
を明かるくてらします。きれいにすんだ秋の月に向  
かふと、心の底まで見とほされるやうで、かくしだて



などは、できないやうな心持になります。

秋は、心もからだも、きりつと

ひきしまつて、氣持のよい

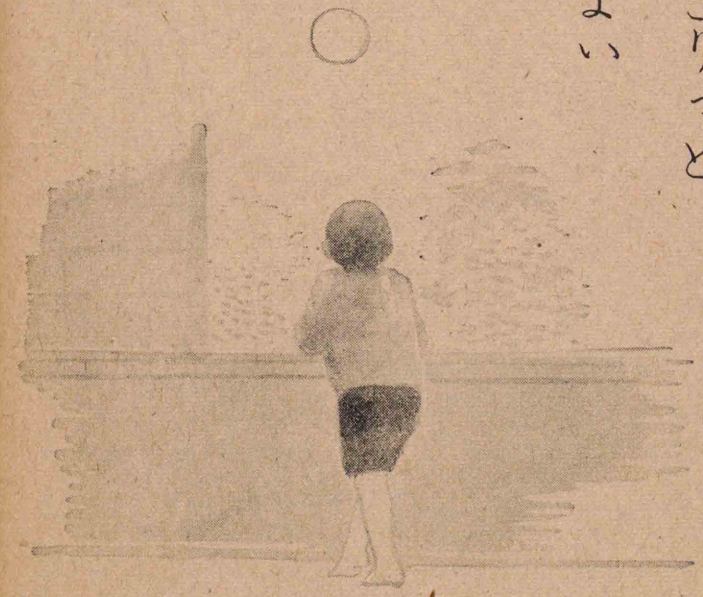
時ですから、からだ

をしつかりときたへ、

また、本を讀んだり

工夫したりするやう

に心がけませう。



十一 にいさん

うら庭で、にいさんといっしょに、すめさんのいも  
を植ゑてみると、何だか、家の中がにぎやかになりま  
した。

やがて、しゃうじがあいて、

「やあ、なかなか精が出るね。」

と、をぢさんの聲がしました。いとこの健ちゃんも、



ここにこしてゐます。

おかあさんが、

「きりのよいところ

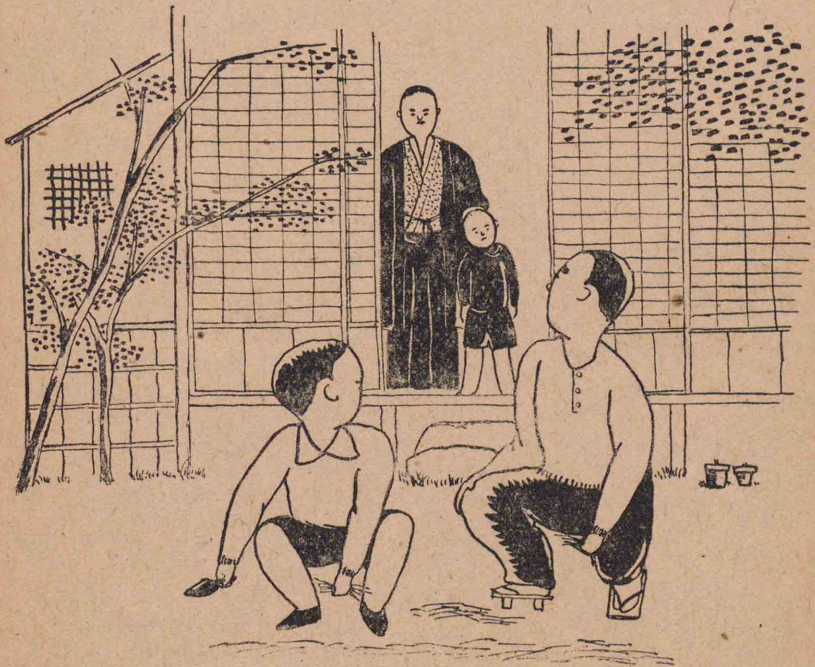
でやめて、うちへ

おはいり。」

といはれました。

ぼくは、にいさん

と、そこらにちらばっ



てゐるわらくづをかたづけて、うちへはいりました。

をちさんが、

「どうだ、武男<sup>たけを</sup>くん。足の方は。」

といはれますと、にいさんは、

「たいしたことはありませんが、まだ、ちよいちよ  
痛みます。」

といひました。ぼくは、にいさんのふじいような足の  
方を、そつと見ました。

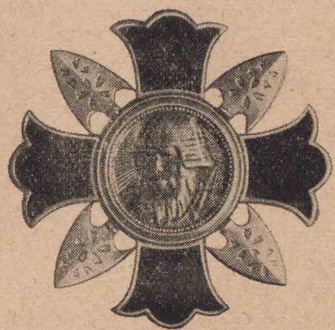


にいさんは、戦地で左の足にけがをして、長い間病院にいましたが、もうよくなったので、この間、かへって来たのです。

をぢさんは、

「だいにするんだね。」

といはれました。



「はい、さうして、もう一度、戦地へ行つてはたらきたいと思ひます。」

と、にいさんは元氣な聲でいひました。

「さうだ。その氣持がたいせつだ。戦地へ行かない者も、みんな、にいさんと同じ氣持で、しごとに精を出して、りっぱに御奉公ごほうこうをしよう。」

と、をぢさんはいはれました。おかあさんが、

「今度は、進や健ちゃんが、兵隊さんになる番ですね。といはれたので、ぼくは、健ちゃんと顔を見合はせて、思はずにつこりしました。」



## 十二 心を一つに

昔、元げんといふ國の大軍が、支那をせめ取った勢で、日本まで押し寄せて來るといふうはさが、つたはりました。

「來るならいつでも來い。一人も上陸させないで、みんなたたきつぶしてやらう。もしも來なければ、こつちから海を渡って、元の國へせめこんで行か

う。」

といふので、日本では、石のとりでをきづいて、いつ敵軍が來ても、打ちはらふことのできる用意をしました。また方々に立札が立って、

「今度、元の國へせめて行くことになった。これにくははりたい者は、名前と年とを書いて、とどけるやうに。」

といふおふれが出ました。



立札の前は、毎日黒山のやうな人ばかりです。中  
でも勇ましい武士たちは、この立札を見て、みんな勇  
み立ち、われもわれもと、あらそつて出征するやうに  
願ひ出ました。

かういふおぢいさんもありました。お國のために、  
自分もどうかして  
出征したいと  
考へましたが、



八十五歳といふ  
年よりなので、  
歩くことさへ  
できません。  
すると、六十五  
になった子どもと、  
四十になった孫とが、  
「しんぱいなさらない





やうに。私たちが、あなたに代って出征して、きつ  
と、りっぱなてがらを立てますから。」  
といひました。

おぢいさんはたいそう喜んで、

「私は、八十五でさんねんながら、おやくにたちませ  
んが、子と孫とはぜひ出征させます。」

といふとどけを書いて、やくしよにさし出しました。  
また、かういふおばあさんもありました。年を取

つてみたので、子ども  
のせわになつてあまし  
たが、このおふれを聞  
くと、自分のふじい  
などはかまはないで、  
「私は、女で戦争に出  
られません、子ど  
も二人は、どんなに





しても出征させます。きっと、夜を日について、かけつけるでせう。」

といふとどけを出しました。

かうして、その時の日本人は、男も女も、年よりも子どもも、みんな心を一つにあはせ、國のためにつくさうといふ心にもえ立ちました。

そののち、元の大軍は、日本に押し寄せて來ましたが、さんざんに破られてしまひました。

### 十三 一つぶの米

二宮<sup>にのみや</sup>金次郎のおとうさんは、金次郎が十四の時になくなりました。

金次郎は、おかあさんの手つだひをして、小さな弟たちのせわをしました。さうして、よく家のためにはたらきました。が、まもなく、おかあさんも死んでしまひました。



金次郎の兄弟は、別れ別れになって、よその家へも  
らはれて行きました。金次郎は、をぢさんのうちで、  
せわになることになりました。

をぢさんのうちにあて、金次郎は、晝は田や畠をた  
がやし、夜は、なはをなったり、わらぢを作ったりし  
ました。悲しいことがあっても、つらいことがあつ  
ても、金次郎はよくしんばうしました。

「家をおこし、國をさかんにするには、心をゆるめな

いではたらかなけれ  
ばならない。」

と考へたのでした。

ある時、金次郎は、川  
ばたのあれ地を開いて、  
なたねをまきました。  
なたねは少ししかあり  
ませんでした。あく





る年の春になると、一面に美しい花が咲いて、春も終るころには、なたねがたくさん取れました。

金次郎は、あぶら屋に頼んで、それをあぶらに代へてもらひました。夜のしごことがすむと、そのあぶらで火をともして、本を讀みました。

ある時、大水が出たことがありました。金次郎は、水のためにあらされてしまったところを、よくたがやし、すててあつた稲の苗を拾ひ集めて、そこに植ゑ

つけました。秋になると、それがよくみのつて、一俵べうのお米が取れました。

「一つぶの米でも、次から次へと育てて行けば、たぐさんの米になる。同じ土地でも、よく手入れをすれば、りっぱな田ができる。なまけると、草がはえて、土地があれてしまふ。」

と考へて、金次郎は、それからいつそう精を出してはたらきました。



十四 多聞丸たもんまる

楠木くすのき正成まさしげは、小さい時の名を、多聞丸といひました。ある日のこと、多聞丸は、自分のへやで、何かこしらへてみました。わき目もふらないで、木を切ったり、けづったり、ほったりしてみました。やがて、できあがったのは、小さなかめでした。多聞丸は、それを持って池へ行きました。

近所の子どもたちが、四五人集って来て、

「何をしてゐるの。」

とたづねました。

「かめをこしらへたのだ。よく見てごらん。」

「なるほど。うまくできてゐる。」

「このかめは、生きてゐるやうに動くよ。動かしてみようか。」

と、多聞丸は、ぼんぼんと手をうちました。す



ると、かめは動いて、ぶ  
くりと水の中へ沈んで  
行きました。

「ふしぎだなあ。」

「これはおどろいた。」

みんなが目をみはって  
あますと、多聞丸は、  
にこにこしながら、



「今度は、かめを呼ん  
でみよう。」

と、いって、ばらばらと  
急さをまきました。す  
るとかめは、ぽかりと  
浮いて、ぐるぐる泳ぎ  
まはりました。

子どもたちは、ただ





あきれてしまひました。

「このかめは、ふなをつるよ。つらせてみようか。」  
みんなは、まさかそんなことはできないであらうと思ひました。多聞丸は、平氣な顔で、かめをそばへよせて、靜かに引きあげました。

かめの腹には、一本の長い馬の毛が、結びつけてありました。さうして、その先には、ひれをつながれたふなが、ぴんぴんはねてみました。

「ああ、ふなが結びつけてある。」

みんなは、始めてしかけがわかつて、すっかり感心しました。

### 十五 消防演習せうぼうえんしゆ

けたたましいベルの音がしました。小使さんが、かねをふりながら、走って來ました。火事の知らせでした。





私たちは、前から先生に、教へられてゐたやうに、急いで窓をしめました。だうぐも何も持たないで、教室を出ました。二列にならび、足もとに氣をつけて、かいだんをおりました。みんな、左

の手をポケットに入れ、右手にハンケチを持って、口をおさへながら、学校の門を出ました。

先生が、一通り、人数をおしらべになりました。みんなあることがわかったので、また歩きだしました。学校からあまり遠くない、あき地まで来ました。

先生が、

「番號。」

といはれたので、私たちは、はっきりと番號をかけま



した。

みんな、あわてないやうに氣をつけて、學校の方を  
見てみました。そのうちに、高等科かうとうの生徒が、二人か  
けて来て、

「急いで校庭かうていに集れ。」

といつて、すぐ引き返しました。私たちは、先生につ  
いて學校へかへりました。

運動場には、消防自動車けいぼうじどうが来てみました。

警防團けいぼうだん

の人たちが、元氣よく立ちはたらいてみました。

ホースが、むく

むくとふくれた

かと思ふと、まも

なく、水が勢よく

出始めました。

水は、だんだん高

くなって、屋根よ





りも上へあがりました。教室に水がはいらないかと、しんぱいしてみると、まもなく水の出るのがやみましました。

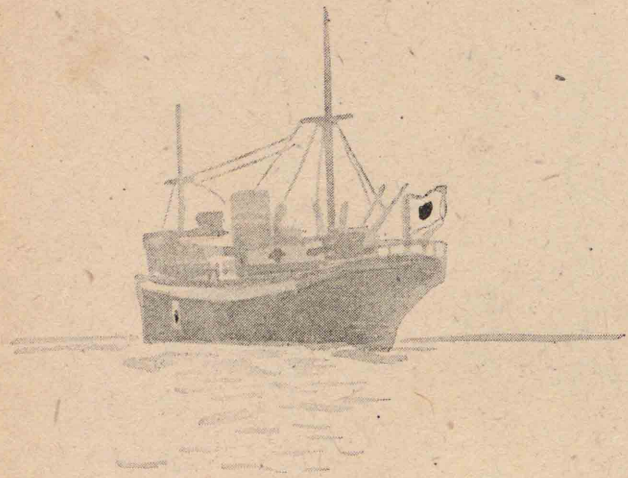
私たちは、消防自動車が見えなくなるまで、見送りました。

### 十六 日の丸の旗

どこの國でも、その國のしるしとして、旗がありま  
す。日本の旗は、日の丸の旗です。朝日、が、勢よく、  
のぼって行くところをうつした旗です。

若葉の間にひるがへる日の  
丸の旗は、いかにも明かるく、  
海を走る船になびく日の丸の  
旗は、元氣よく見えます。

青くすんだ空に、高々とか  
かげられた日の丸の旗は、い





かにもけだかく、雪のつもった家の、軒先に立てられた日の丸の旗は、何となく暖く見えます。

日の丸の旗は、いつ見ても、ほんたうにりっぱな旗です。

祝祭日しゅくさいじつに、朝早く起きて、日の丸の旗を立てると、私どもは、

「この旗を、立てることのできる国民だ。」

「私たちは、しあはせな日本の子どもだ。」

と、つくづく感じます。

日本人のあるところには、かならず日の丸の旗があります。どんな遠いところに行ってもある日本人でも、日の丸の旗をだいにして持ってゐます。さう





して、日本の國のおめでたい日や、記念の日には、日の丸の旗を立てて、心からおいはひをいたします。

敵軍を追ひはらって、せんりやうしたところに、まっ先に高く立てるのは、やはり日の丸の旗です。兵士たちは、この旗の下に集って、聲をかぎり、「ばんざい。」をさけびます。

日の丸の旗は、日本人のたましひと、はなれることのできない旗です。

### 十七 冬

冬になって北風が吹き始めると、草は土の下で眠りにつき、木は葉をすっかり落して、冬ごもりの用意をします。さびしくなった田や畠の中では、寒さに強い麥だけが、青いうねを作っています。

子どもたちは、風の中に立って、みせいよく麥ふみをします。



麥ふめ ほうい。

麥ふめ ほうい。

麥はふまれると、根が  
いっそう強くなるので  
す。根を深くはって、  
雪やしもにも、たへし  
のんで、強い底力をや  
しなひながら、春の來



るのを待ちます。

麥ふめ ほうい。 麥ふめ ほうい。

子どもたちの勇ましい聲は、北風にのって、遠くまで  
聞えて行きます。

山には、早くから雪がつもって、白くなります。雪  
は、だんだん、平地にも降って来て、地面をも、まっ白  
にします。

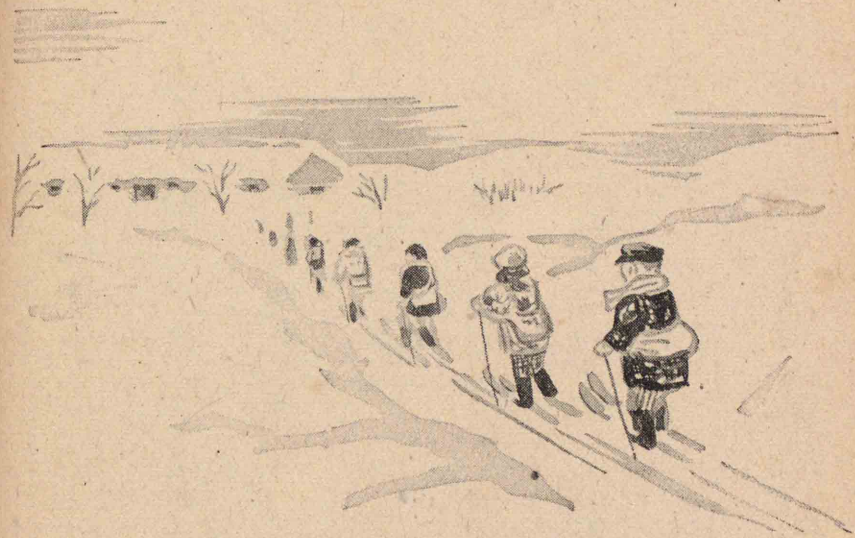
雪のたくさん降る地方では、つもった上にも、つも



つて、家の軒先まで、とどくやうになります。

子どもたちは、スキーで列を作つて、元氣よく、学校へ通ひます。みんな、はげしい寒さに負けないうで、楽しく雪國の冬をくらすのです。

雪の降るころには、海の色



は暗く、波は高くなります。波は、いその岩にくだけて、まっ白いしぶきを立っています。

しほ風は、身を切るやうに、つめたいものです。いそべの松が、しほ風に吹かれて強くなるやうに、海べの子どもたちは、寒い波風にきたへられながら、強くなくなって行きます。

冬はどこにゐても、強くなるのに、よいきせつです。ををしい氣持でくらすのに、よいきせつです。



十八 圓山應舉

應舉は、京都きやうとのぎをんの社やしろに出かけて行って、毎日、鶏の遊んでゐるやうすを見てみました。じつと、鶏ばかりみつめてゐるので、人はふしぎに思ひました。一年ばかりたってから、應舉は、鶏の繪をかいて、社にをさめました。

お参りに来た人たちは、

「よくかけてゐる。」

「まるで生きてゐるやうだ。」

と、ほめました。

ある日、やさいを賣って歩くおぢいさんが通りかかって、しばらく見てみました。

「鶏はいいが、草があるのはをかしい。」

と、おぢいさんは、ひとりごとをいひました。

應舉は、そのことを聞いて、おぢいさんの家へたづ



ねで行きました。

おぢいさんは、

「私など、繪のことは少しも

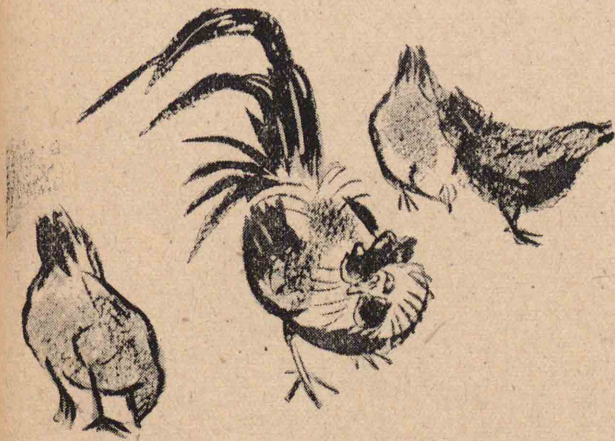
わかりませんが、ただ、

長い間、鶏を飼って

みますので、羽の色

つやが、きせつによ

つてちがふことを、



ぞんじてをり

ます。あの鶏

の羽は、冬のやう

ですが、そばに夏

の草がかきそへて

あるので、ふしぎに思ったのでございます。しつ

れいなことを申しまして、まことにすみませんで

した。」





といひました。應舉は、

「よいことを教へてくださった。」

と、ていねいにお禮をいってかへりました。

應舉は、そののち、また鶏の繪をかいて、あのおぢいさんに見せました。おぢいさんは、すっかり感心しました。それよりも、自分のやうな者にでもよく聞いて、繪をかかうとする應舉を、ほんたうにりっぱな人だと思ひました。

十九 負けじたましひ

板垣退助いたがきたいすけは、小さい時から負けぎらひでした。

すまふがすきで、仲よしの後藤象二郎ごとうしやうじらうと、よくすまふをとって遊びました。

象二郎が強いので、何度とってもかなひません。けれども、退助は、投げられても、倒されても、起きあがるとすぐ、



「もう一度やってくれ。」  
と行って、とびかかって  
行きました。

退助があまり  
こんきよいので、  
しまひには、  
象二郎の方で、

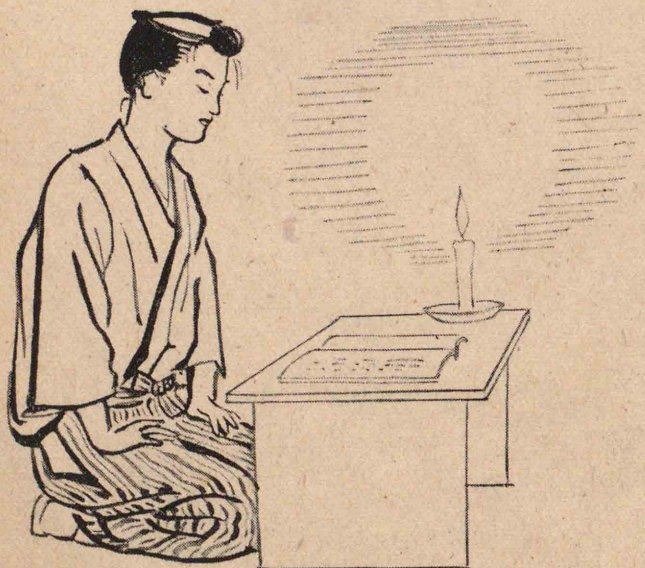
「わたしが負けた。わたしが負けた。」



と行って、退助の負けぎらひなのに感心しました。

※

後藤新平は、まづし  
い家に生まれたので、  
子どものころは、いつ  
も、つぎのあたった着  
物を着てみました。け  
れども、新平は、平氣で





學校へ通ひました。

夜は、眠くなるのをふせぐために、てんじやうからなはをつるして、それでからだをしばって、勉強をつづけました。

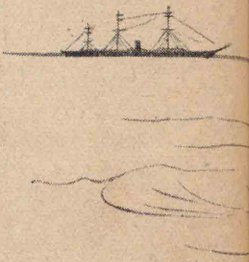


大山巖おほやまいははが、若い時のことでした。

イギリスの軍艦が、鹿兒島かごしまへせめ

寄せて来たことがあります。

海と陸とで、はげしく大砲をうちあひましたが、なかなか勝ち負けがつきません。



これを見た元氣な巖は、いきなり着物をぬぎすて、刀をせおって、敵艦めがけて、勢よく泳いで行きました。敵軍は、この勇ましい姿を見て、びっくりしました。



二十 皇后陛下くわうごう

皇后陛下は、たいそうおなさけ深く、國民をよくお  
いつくしみになります。

小さい時から、たいそうおきまりよく、ごしつそ  
におくらしになりました。

おもちひになるものは、いつもだいじにお取りあ  
つかひになり、そのせいとんも、ごじしんでなさいま

した。

關東くわんとうに大ぢしんがあつたと  
きには、たくさんの着物をお  
ぬひになって、困つてゐる者  
にお恵みになりました。

滿洲事變じへんには、戦地の寒さ  
をお思ひになって、軍人たち

に、まわたをたまはりました。戦場で、きずを受けた





九十八  
人たちに、ごじしんでお作りになった、はうたいをた  
まはりました。

支那事變が起ってからは、いくたびとなく、陸海軍  
の病院へお出ましになって、白衣の勇士をおなぐさ  
めになりました。お庭にできた草花などを、おつか  
はしになったこともあります。また、戦地にある軍  
人のために、わざわざおあみになった、えりまきをた  
まはったこともあります。

私どもは、日本國民として、皇后陛下の御恵みを、  
しみじみと、ありがたく感じるものであります。



昭和十八年十月廿九日  
文部省檢査日

昭和十七年二月廿一日  
昭和十八年十月廿五日  
昭和十八年十月廿六日  
昭和十八年十二月廿一日  
發行  
修正  
印刷  
翻刻  
發行

著作權所有

著者兼  
發行者

文部省

初等科修身一

定價金拾八錢  
か



翻刻發行  
兼印刷者

東京都王子區堀船町一丁目八百五十七番地  
代表者 井上源之丞

印刷所

東京書籍株式會社工場

發行所

東京書籍株式會社



広島大学図書

2000022339

